

チョムスキーの「標準理論」再考

Chomsky's "Standard Theory" Revisited

後藤田 輝 雄

1. はじめに

チョムスキーの生成文法理論は、『文法の構造』(1957)の出版以来、数々の修正を経て、現在では『統率・束縛理論』(1981)を中心に展開されている。30年以上にわたって、チョムスキー理論を巡って多数の博士論文が書かれ、賛否両論の著作が出版されてきた。その結果、無数の特殊語句(jargon)と、それらの訳語や略語が造り出され、それらが一人歩きをし、学校文法、伝統文法に多少の知識を持つものにとっても、この分野に接近することを著しく困難にしている。一例を挙げると、「英語青年」(研究社)(1991)のある小論文の書出しは、次のような文で始まっている。

「英語における典型的な一般現象は、主語の人称・数が動詞の形態に反映される現象である。主語は IP の指定部であり、一致要素(AGR)を含む INFL は IP の主要部であるから、この現象は指定部・主要部一致(Spec Head Agreement, 以下 SHA と略す)と呼ばれている。

Chomsky (1986b)ではこの考え方が拡大され、SHA は CP 構造でも適用されると考えられる……」

疑いもなく、上記の小論文は、極めて少数のこの分野の専門家を対象に書かれていることは明らかであり、この点を非難しても致し方ないことであろう。チョムスキーの著作にしても、かなりの予備知識なくしては理解することができない。その例として次に、チョムスキーの *Barriers*(1986), p.2 からの文章を引用する。

Let us begin with some questions concerning X-bar theory. Assume a distinction between lexical and nonlexical categories, where the lexical categories are based on the

features $[\pm N, \pm V]$, yielding the categories Noun ($[+N, -V]$), Verb ($[-N, +V]$), Adjective ($[+N, +V]$), and Preposition-Postposition ($[-N, -V]$). The nonlexical categories include complementizer and INFL, the latter including Tense and Agreement elements and Modals. Assume that other categories are projections of these zero-level categories in terms of the following schemata (order parametrized; the choices here are for English, the convention I shall adopt throughout), where X^* stands for zero or more occurrences of some maximal projection and $X = X^{0:1}$

最初に掲げた日本語による例文の意味をよく理解するために、いったい何冊の専門書を読む必要があるだろうか。チョムスキー理論は、それぞれの発展段階で「初期理論」、「標準理論」、「拡大標準理論」、「修正拡大標準理論」、「原理変数理論」などと呼ばれ、生成文法理論の精緻化が多くの研究者の協力によって行なわれてきたが、その過程で付け加えられたり、放棄された考え方も多い。チョムスキー理論の枠組みの中で、どの考え方がいつ誰によって、どのように修正され、付加され、放棄されたかの全容を、この分野のすべての研究者が把握しているわけではない。したがって、生成文法理論に学生を巻き込み、直ちに「原理変数理論」から入門させることは狂気の沙汰であり、初心者は jargon の迷路で身動きがとれなくなり挫折することは必定である。このような結果を避けるためには、やはり、チョムスキーの「標準理論」(1965)まで遡って学習する以外には手はないものと思われる。言い換えれば、生成文法理論への入門コストはかなり高くつくのである。しかし、この障害を乗り越えたものにとっては、「原理変数理論」への道は、知的訓練の格好のプロセスである。チョムスキー理論の効用や魅力は、生成文法理論の背景にある、彼の人間観、言語観を中心とする思考の体系と、言語知識に接近するための方法から抽出できる内容豊かな洞察であると言えよう。

2. 深層構造と変形

チョムスキーの文法理論(統語論)を特徴づける基本的に最も重要な概念化は、文の形式(form)を表す「表層構造」とは別に、文の意味(meaning)を表す「深層構造」を設定したことである。深層構造に入力された文法規則(Phrase Structure Rules)と語彙項目(Lexicon)が、種々の変形操作を経て、表層構造の出力が得られるとする理論であり、この考え方を巡って「標準理論」が展開される。これを含む彼の著書 *Aspects of the Theory of Syntax* に因んで、「標準理論」は、また、Aspects Model とも呼ばれている。ここでは、意味は深層構造で、形式は表層構造で与えられ、この二つのレベルを媒介するものが、種々の変形規則である。もちろん、変形を無制限に許すと収拾がつかなくなるので、「変形

は意味を変えない。」という条件が課せられた。これを「カッツ・ポスタルの仮説」(Katz-Postal Hypothesis)と言う。

カッツ・ポスタルの仮説をさらに拡大解釈し、二つの文の表層構造が異なっても、意味が同じであれば、同一の深層構造を持つ筈であると考えた人々が一つの学派を形成し、いわゆる「生成意味論」を展開し、「標準理論」に挑戦した。これらの生成意味論者によれば、下記の二つの文は、表層では異なるが、意味が同じであるから、同一の深層構造を持つ筈であるとした。

- (1) a. The accident killed John.
 b. The accident caused John to die.

しかし、単一の深層構造から、このような異なる語彙項目をもつ二つの表層構造文を抽出しようとするれば、語彙項目の機能は無視されるうえ、なお一層、「深い」深層構造が設定されなければならない、もし不可能でないとしても、変形規則は、殆ど手におえないほど複雑にならざるを得ない。変形を絶対視したがゆえに、彼らの立場は、transformationalist position と呼ばれた。これとは対称的に、チョムスキーの「標準理論」の立場は、語彙項目 (lexicon) を重視し、これを深層構造に挿入するがゆえに、lexicalist position と呼ばれた。

生成意味論者の研究成果の中には、言語理論として数々の興味深い提案もあったが、変形規則へ過剰依存は確かに行き過ぎであった。このような変形規則の絶対視と語彙項目の軽視が主な原因で、「生成意味論」は行き詰まり、1970年代の中頃には急速に失墜した。これを契機に、深層構造の存在までも疑問視する理論が現われ始めた。その一つは、1970年代の終わりに、ジェラルド・ギャズダー (Gerald Gazdar) によって展開された「一般化句構造文法」(Generalized Phrase Structure Grammar — GPSG) で、いっさいの変形を廃止するものであった。また、ジョウン・ブレズナン (Joan Bresnan) とロン・キャプラン (Ron Kaplan) が提唱した「語彙機能文法」(Lexical-Functional Grammar) では、主語や目的語などの文法関係は、語彙部門の機能として表層構造で取り扱われ、これが変形の代用となり、深層構造から表層構造への統語論レベルの変形を必要としないものである。

では、深層構造を廃止して、表層構造ですべての意味解釈を行なう利点は、何であろうか？ チョムスキーは、言語を階層的構造をなすものと見做し、しばしば、句構造を枝分かれ図 (tree diagram) を用いて説明するばかりではなく、さらに、この考え方を発展させて「統率・束縛理論」(1981) を展開する。しかし、このような階層的構造をもつ、チョムスキーの言語モデルを使って、自然言語をノイマン型コンピューターで処理するためには、複雑な手続き的プログラミングを必要とし、効率が悪いという欠点があると言われ

ている。プログラムの展開は、まず、形態素解析から始め、続いて、統語解析をやり、それから、意味解析をやるという順序になる。これに反して、すべての意味解釈を単層構造で扱うことができる文法理論があれば、機械翻訳など、自然言語をコンピューターで処理する場合、論理プログラミングとの相性がよい単層構造型文法のほうが、ノイマン型コンピューター上では、さらに効率がよくなるかも知れない。

しかしながら、チョムスキーの言語理論は、そもそも自然言語に関心を持つものではないことを知らなければならない。チョムスキーにとっては、実際に話されたり書かれたりするものは、派生的、人工的構造物 (derivative and largely artificial construct) (*Knowledge of Language*, p.29) であって、真の言語ではない。それでは、彼にとって、真の言語とは何か？ 内在化された言語 (Internalized Language)、すなわち、頭脳内に獲得された、文を生成する言語知識、その言語能力そのものが、真の言語なのである。「統率・束縛理論」では、このような言語能力は、極度に抽象化された原理群、変数群からなる「モジュール構造 (群構造)」をなしている。もちろん、いうまでもなく、人間の言語処理過程における手順は、モジュール構造をなしているわけではない。人間の頭脳では、おそらく、言語処理は、形態的情報も、統語的情報も、意味的情報も、すべて同時並行的に行なわれているものと考えられる。この意味で、言語処理における人間の頭脳の働きを、ノイマン型コンピューターが代用することは不可能である。

チョムスキーの「痕跡理論」(Trace Theory) や「統率・束縛理論」(Government & Binding Theory)における、「空範疇原理」(Empty Category Principle)に見られるように、4種類の無形代名詞 (NP-trace, wh-trace, pro, PRO)の存在についての仮説によって、より表層構造への傾斜を示す傾向が見られるが、チョムスキー自身は、深層構造の存在を放棄したわけではない。手続きプログラムである「変形」を著しく制限して簡単にし、その代わり、多数の原理と変数からなる複雑な「モジュール構造」の理論を展開してみても、それは、チョムスキーの lexicalist position の理論的延長線上にあるものと言えよう。この意味で、現在の「原理変数理論」の萌芽は、「標準理論」にあったと考えるのが適当であろう。言い換えれば、チョムスキーの「標準理論」は、「変形主義」と「語彙項目主義」の両面を備えたバランスのとれた文法理論であり、「語彙項目主義」を基盤として「原理変数理論」が生まれたと言える。

しかしながら、生成意味論的変形主義者の没落の影響を受けて、チョムスキーは、次第に、深層構造や変形操作について曖昧な態度をとるようになった。そして、文の意味解釈は表層構造における位置によっても決定されることや、表層構造である文強勢アクセントが貢献することから、「意味解釈は深層構造と表層構造両方の情報より決定される」、と考え方を修正し、さらにその後、「意味解釈はすべて表層構造で与えられる」ことを提案し、「標準理論」とは真っ向から矛盾し、自ら、自分の理論の根底を否定しかねない大修正を

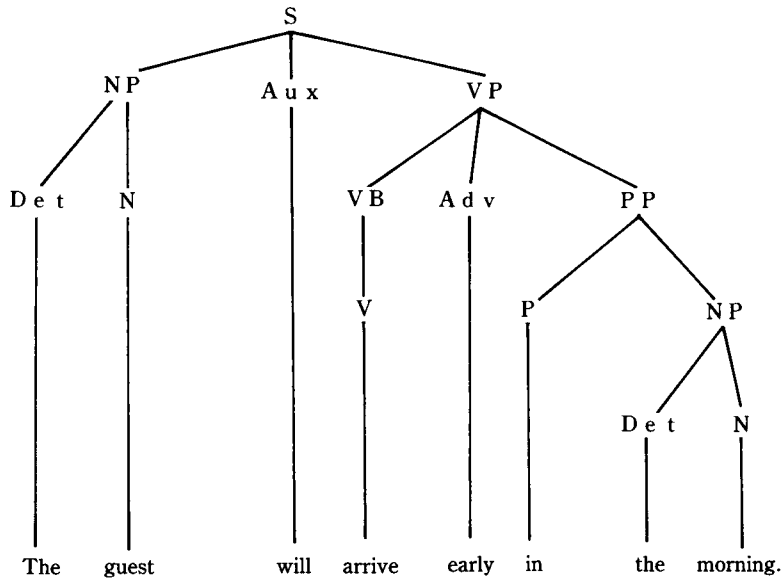
行なったのである。このような表層構造への傾斜が、論理プログラミングの可能性を高めるとしても、また、これが彼の「原理変数理論」についての、自負にもとづくものであるかも知れないとしても、「変形」の軽視は、生成意味論者による過剰変形重視と裏腹であり、「標準理論」が持っていたバランスを、チョムスキー理論から奪うことになり、自らの墓穴を掘ることになりかねない。

3. 「標準理論」の句構造と「原理変数理論」の句構造

生成文法の句構造の今昔を説明するために、次の文の表層構造を枝分かれ図で示して見よう。

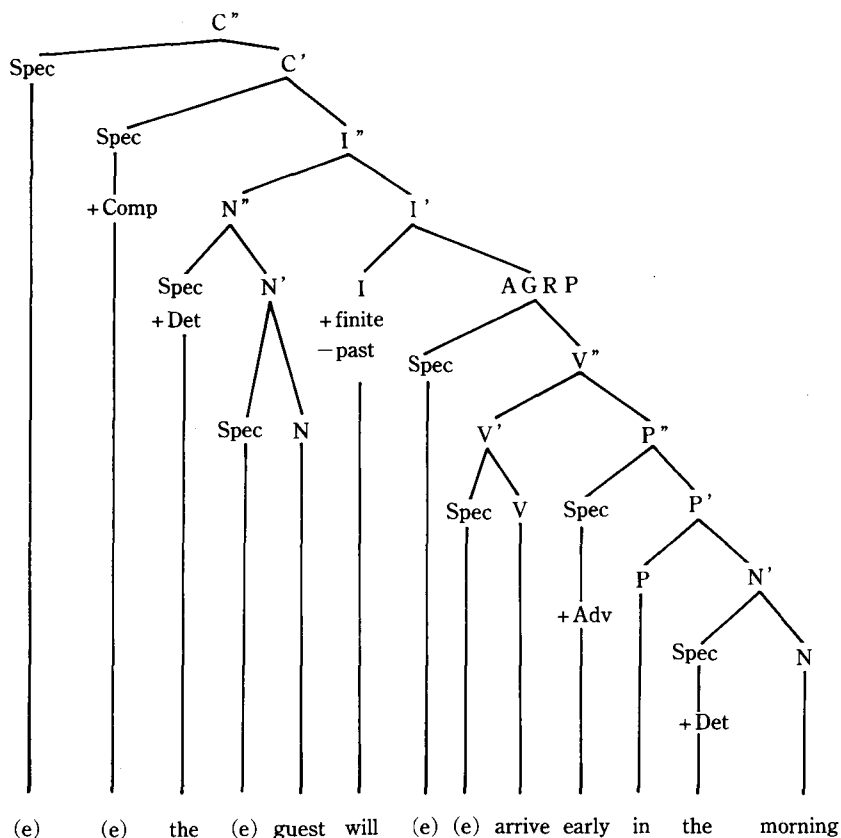
- (2) The guest will arrive early in the morning.

(標準理論モデル) Table 1



S = Sentence (文) ; NP=Noun Phrase (名詞句) : N = Noun(名詞);
 Aux=Auxiliary(助動詞部) ; VP=Verb Phrase(動詞句) ; VB=Verbial(動詞部);
 V = Verb(動詞) ; Ady=Adverb(副詞) ; PP=Prepositional Phrase (前置詞句);
 P =Preposition(前置詞) ; Det=Determiner(限定詞)

(原理変数理論モデル) Table 2



Spec=Specifier (指定部);

(e) = (empty category) (空範疇);

C'' = CP=Complement Phrase (補文句) ; C' = Complement (補部);

C=Comp=Complementizer(補文標識) ; I'' = Inflectional Phrase=IP

I'' = S=Sentence ; I' = INFL=Inflection (助動詞部);

I = Inflection(助動詞);

AGRP=Agreement Phrase(呼応詞句)

V'' = VP=Verb Phrase(動詞句)

V' = Verbial (動詞部); V=Verb(動詞)

「標準理論モデル」から見て、「原理変数理論モデル」の枝分かれ図は、極めて複雑になっていることに誰もが気付くであろう。その上、より抽象的な見慣れない記号が多数使われ、メタ言語の語彙からは、その具体的な実体を把握することが困難である。さらに困ったことには、用語も訳語も統一されておらず、同じものであっても人によって異なった表記になる。たとえば、 C'' （シー・ダブルバーと読む）は、もともと、「C」の文字のうゑに「=」を乗せて表記していたのであるが、普通のワープロやタイプライター上での表示が厄介なため、「 \bar{C} 」を使うようになった。しかし、読み方は変わらず、これを「ダブルバー」と読むのである。また、 C'' は Complement Phrase (補文句) (後述) のことで、CPとも表記され、 I'' (屈折句) を主要部 (Head) とすれば、その最大投射 (maximal projection) (後述) となっている。

上記の下線を施した文は、専門外の方々には、理解不可能な文であるが、この分野の専門の方々には御理解頂ける文である。上記の文は、筆者のオリジナルな文である。ところで、筆者はこれまでに、これとまったく同じ文を、他人が書いたのを見たり、話すのを聞いたりしたことがない。にもかかわらず、どうしてこのような新奇な文を「生成」することができるのであろうか？ チョムスキーによれば、このような新奇な文の生成を無限に可能にするものが、生来的に、人間に備わった「文法を内在化する能力」、すなわち、「言語能力」(competence)なのである。

次に、 I'' (アイ・ダブルバーと読む) は、Inflectional Phrase (屈折句) (後述) のことで、IPとも表記され、主要部 I の最大投射であり、「標準理論モデル」の S = Sentence に相当する。 I' (アイ・バーと読む) は、I (屈折構成要素) の投射であり、「標準理論モデル」の Aux (助動詞) に相当する。助動詞を Aux の代わりに、屈折を意味する INFL、または、I で表記することは、伝統文法に親しんだ方々には抵抗があろう。チョムスキー (1989) は、I が、[+finite] (定形) であれば、[±past] となり、[-finite] (不定形) であれば、“to” となると仮定した。このようにして、Aux (auxiliary) と I (inflection) を同一視するに至ったのである。確かに、Tense と Aspect は、“-ed/en”, “-ing” のような語尾変化 (屈折) を与えるが、だからと言って、inflection を「助動詞」と訳すことにも少なからず抵抗を感じるのは、筆者だけではあるまい。

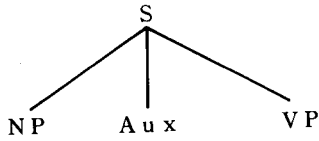
次に、文を表記する式を比較すると、「標準理論モデル」では、 $S \rightarrow NP Aux VP$ であるが、「原理変数理論モデル」では、これは、5つの式になる。

- (1) $C'' \rightarrow Spec C'$; (2) $C' \rightarrow Spec I''$
- (3) $I'' \rightarrow N'' I'$; (4) $I' \rightarrow I AGRP$; (5) $AGRP \rightarrow SPEC V''$

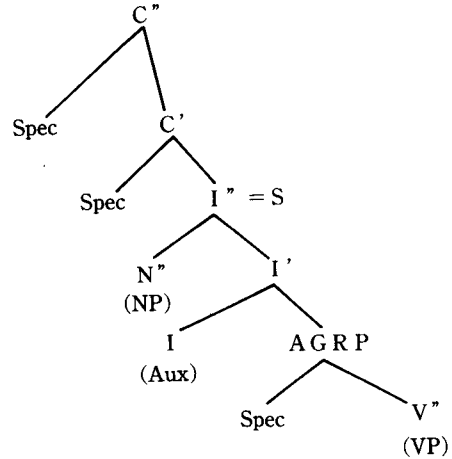
ここでは、 $C'' = CP$; $I'' = IP = S$; $N'' = NP$; $I' = INFL$; $I = Aux$; $V'' = VP$

と考えると、それぞれの枝分かれ図を比べると、その違いがわかりやすい。

(標準理論モデル) Table 3

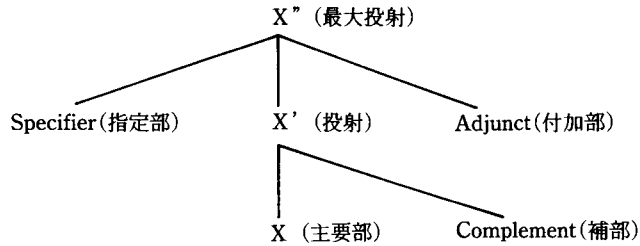


(原理変数モデル) Table 4



「統率・束縛理論」では、すべての句 (phrase)には、二つの階層レベルが必要であると考えられる。すなわち、Head (主要部) をXとすると、X' はXの投射と言い、また、X' を主要部と見ると、X'' はX' の投射となり、Xの最大投射 (maximal projection) と言う。これを最大投射原理 (maximal projection principle) と言い、枝分かれ図で示すと次のようになる。

Table 5



このようにして、Table 4 から明らかなように、I” (文) の最大投射は、C”、すなわち、CP= Complement Phrase (補文句) ということになる。言い換えれば、すべての文 (I” = S) は、CPの中に、はめ込まれた補文 (embedded sentence) と見做すのである。生成文法の発展の歴史を知らない者にとっては、すべての文が、はめ込み文、すなわち、従属節であるとの説明は受け入れがたいであろうが、Xバー理論でその存在が仮説される指定部は、仮定上の空範疇か、変形ルールによって他に移動した痕跡 (trace) であって、表層構造 (S-構造) では現われないものである。

ここで、(2) の文に語彙項目を挿入して、「標準理論モデル」による深層構造の枝分かれ図を示すことにする。すべての語彙項目は、[±] で表示される数多くの「統語素性」(syntactic features) と「意味素性」(semantic features) とのパラメーター (媒介変数) からなる。(下線の素性は「統語素性」、他は「意味素性」)

(標準理論モデル) Table 6

深層構造

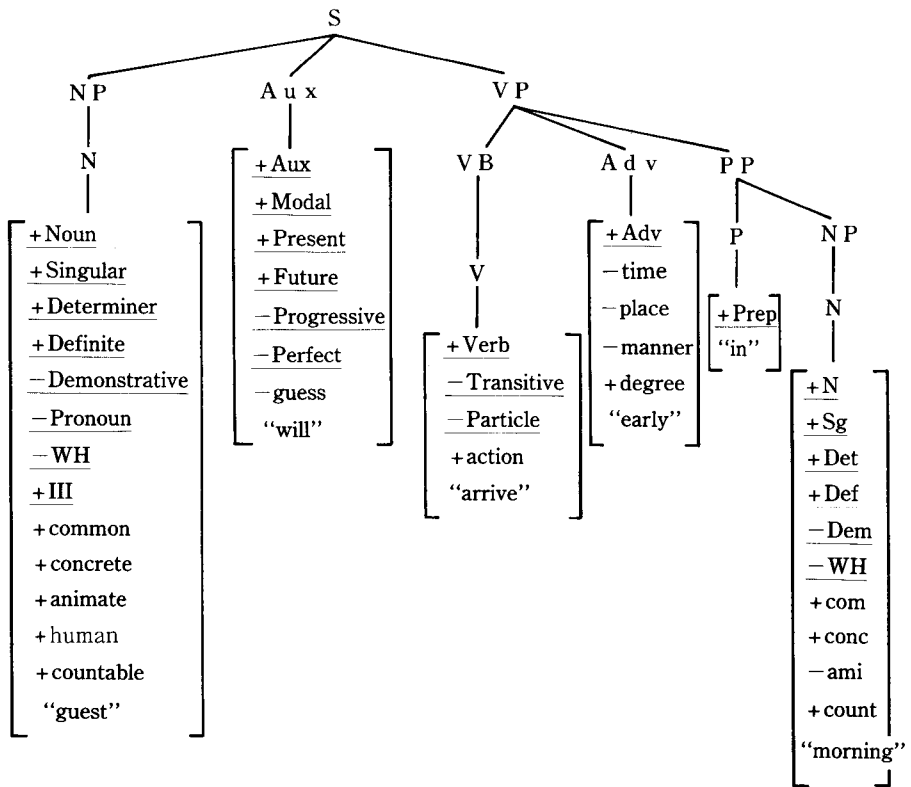


Table 6 の深層構造から、Table 1 の表層構造が一定の変形規則によって生成される。(2) の文の深層構造の枝分かれ図と表層構造のそれを比べてみると、語彙項目を除けば、統語レベルでは、限定詞 (Determiner) の有無だけである。したがって、主な変形ルールは、名詞句 (NP) から限定詞を生成する、限定詞派生変形規則 (T-Determiner) のみである。これは名詞句の語彙項目に含まれる統語素性の中から、[+Determiner], [+Definite], [-Demonstrative] などの統語情報を得て、名詞の左側に “the” を生成する規則である。すなわち、冠詞の “the” は変形ルールによって生成されるのであって、もともと深層構造には含まれてはいないと考えられる。私たちが、“the guest” と言おうとするとき、私たちの頭脳は、まず、“the” を考えて、それから、“guest” を思い浮べるであろうか？ 想像する以外に、これを確かめる方法はないが、“guest” をまず思い浮かべてから、これに冠詞が必要であるか、または、単数か複数かを瞬時に、無意識のレベルで判断して、“the” を付けたり、“-s” を付けたり付けなかったり、するのではないだろうか？ もし、これが正しいとすると、変形ルールは廃止する、ですませることはできないものと思われる。そして、このような判断を可能にするものが、頭脳に「内在化された文法」である。チョムスキーにとって、このようにして内在化された言語 (internalized language = I-language) のみが真の言語であり、それ以外の言語現象 (externalized language = E-language) は工芸品 (artifact) に過ぎず、言語理論の中で何ら役割を持たないものである。(1986a, p.26) また、彼の最大の関心事は、普遍文法の構築、すなわち、人間のすべての言語に共通する文法の追求であって、個別言語の文法を完成させることが一番の目的ではないことを知らなければならない。深層構造は、個別言語でさえも、このような高度に抽象的、論理的なレベルで取り扱うことを可能にするための、手掛かりを与えるものであると言えよう。

標準理論モデルの枠組みの中で、文を表す句構造式、 $S \rightarrow NP \text{ Aux VP}$ は、さらに、精密化され、下記のようなになる。

$$1. S \rightarrow \left(\begin{array}{c} Q \\ \text{Imp} \end{array} \right) (\text{Neg}) \text{ NP Aux VP}$$

$$2. NP \rightarrow \left\{ \begin{array}{ccc} (\text{Det}) & N & (S) \\ \text{NP} & S & \end{array} \right\}$$

$$3. VP \rightarrow \text{VB} (\text{NP}) \left(\begin{array}{c} \text{NP} \\ S \\ \text{PP} \end{array} \right) (\text{PP})$$

$$4. PP \rightarrow \text{P NP}$$

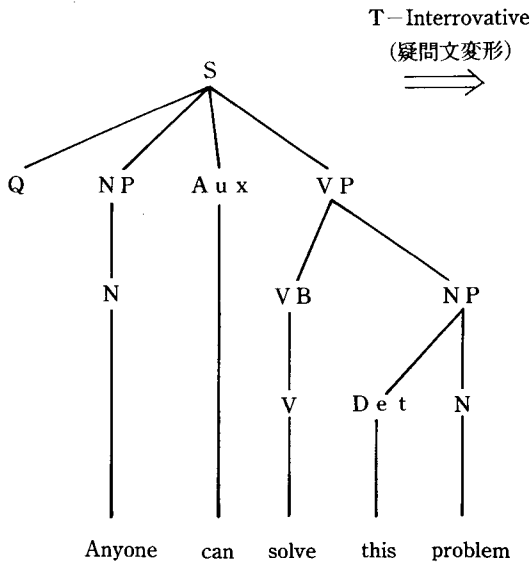
5. AdvP → { Adv }
 { PP }

S = Sentence; Q = Question (疑問文); Imp = Imperative (命令文);
 Neg = Negative (否定文);

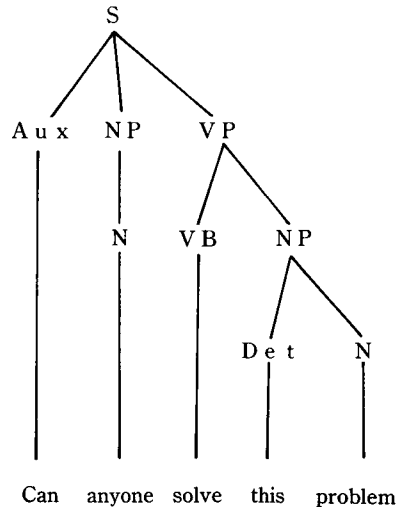
“Q”, “Imp”, “Neg” は、いずれも仮説的構成要素 (hypothetical constituent) であって、表層構造には現われないものである。私たちは、ある文を思い浮かべるとき、まずそれが、疑問文であるか、命令文であるか、否定文であるかを、無意識のレベルで、予め決めているに違いない。だから、英語の場合、疑問文であれば、助動詞や BE 動詞を主語の前に移動させたり (T-Interrogative)、疑問詞を文頭に持ってくるし (T-WH-question)、命令文であれば、主語の “You” を無意識で削除するもの (T-Imperative) と考えられる。

(3) Can anyone solve this problem?

(深層構造) Table 7



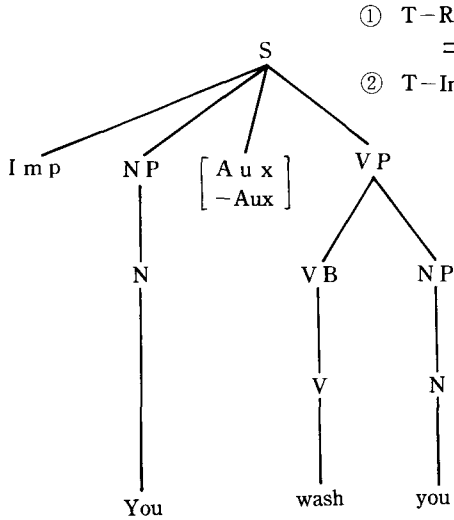
(表層構造) Table 8



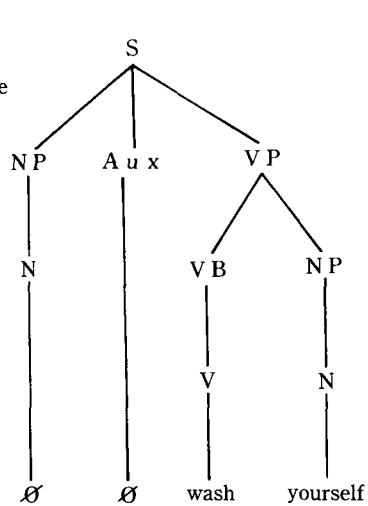
次に、命令文変形を考えてみよう。

(4) Wash yourself.

(深層構造) Table 9



(表層構造) Table 10



- ① T-Reflexive
 \Rightarrow
 ② T-Imperative

Table 9は、(4)の文の大雑把な深層構造である。これから、(4) Wash yourself. を得るためには、少なくとも2つの変形規則が適用されなければならない。そして、これには順序が大切である。すなわち、まず、再帰代名詞変形 (T-Reflexive) が適用されることが必要である。これは、同一のSによってコントロール (統御) されるNPが、その意味に於いて同じもの (equi-NPs) であれば、2番目のNPを“-self/-selves”の形に変形するものである。次に、命令文変形規則 (T-Imperative) の適用であるが、これは、主語の“You”と仮說的構成要素“Imp”を削除するものである。ところで、もしこの順序を逆にして、先に命令文変形を適用して、最初のNPを削除してしまうと、1つのNPの文を出力することになり、2番目のNPを“-self”の形に変形する規則の適用が不可能になる。このように、数多くの変形規則を適用する必要がある場合は、これらの順序に気をつけなければならないということになる。

標準理論モデルでは、すべての変形は、次の3つのいずれかであった。(1) 付加 (adjunction)、すなわち、何らかの部分 (segment) の導入；(2) 代入、または、置き換え (substitution or replacement)、たとえば、能動態から受動態への転換；(3) 消去 (deletion)、すなわち、何らかの要素をゼロ “null element” と置き換える、などである。

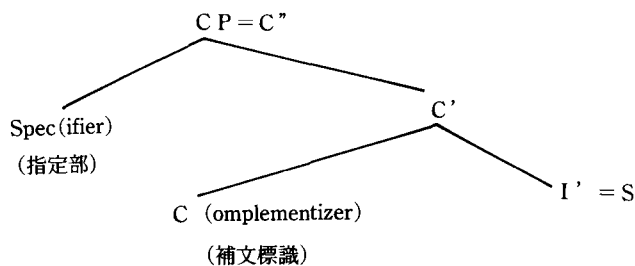
しかし、原理変数理論モデルでは、チョムスキーは、これらの変形に大なたをふるって、変形は「移動」という1種類だけであると修正し、これを“Move α ”と呼んでいる。普遍文法の立場から言えば、これを承認しない訳にはいかないかもしれないが、英語を取り扱う個別文法においては、これで十分であるかどうかは疑わしい。したがって、原理変数理論は、生成文法である点では変わりがないが、もはや、変形文法ではないと言われるゆえんである。

4. 伝統文法と生成文法

生成文法を学び始めた人が、最初に気が付くことの1つに、伝統文法で使われる文法用語の多くが、生成文法では、かなり異なる概念として使用されていることである。たとえば、まず何より、「句」(phrase)と「文」(sentence)の概念上の相違である。生成文法では、名詞1語でも「名詞句」(NP=Noun Phrase)と呼ばれる。動詞、形容詞、副詞についても同様に、動詞句(VP)、形容詞句(AP)、副詞句(AdvP)である。原理変数理論モデルでは、表層構造(S-structure)には現われない、「補文句」(CP=Complement Phrase)、「屈折句」(Inflectional Phrase)、「呼応詞句」(AGRP=Agreement Phrase)、「否定詞句」(Negative Phrase)などに見られるように、伝統文法とはまったく異なる句概念が使われている。これらは、原理変数理論モデルで必要とされる「投射原理」の枝分かれ図の上位の節点(node)となるものである。また、名詞1語でも名詞句であるのは、名詞の深層構造の語彙項目に含まれる統語素性、[+Determiner]によって、限定詞が生成され、名詞句となるからである。

「文」(S=Sentence)についても、生成文法では、大部分の不定詞句は「句」ではなくて、「文」(S)である。また、原理変数理論モデルでは、すべての「文」は、はめ込み文(embedded sentence)、すなわち、伝統文法でいう「従属節」である。Table 2の枝分かれ図を、もう一度参照して戴きたい。ここでは、 $S = I'$ であるが、 I' は「投射原理」によって、その最大投射である仮説的 CP 構造の中に、 C' (補文)として、補文標識と共に、いわば「従属節」のように、はめ込まれていることがお分かりになるだろう。

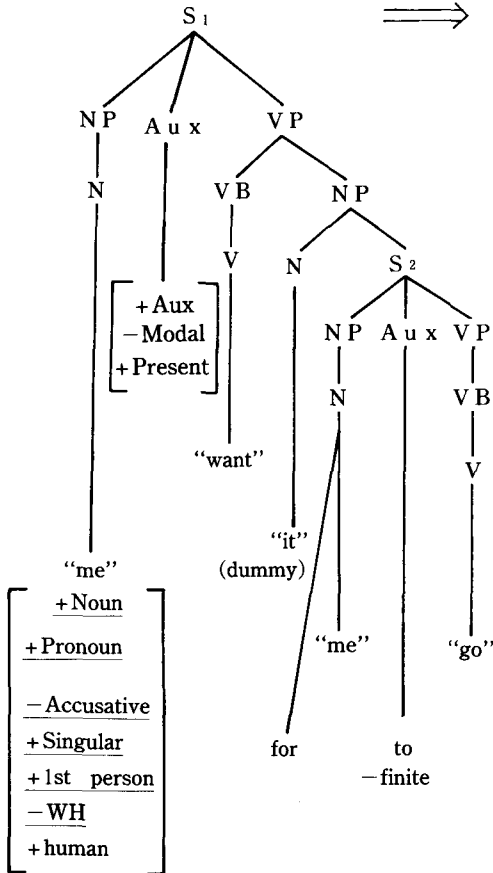
Table 11



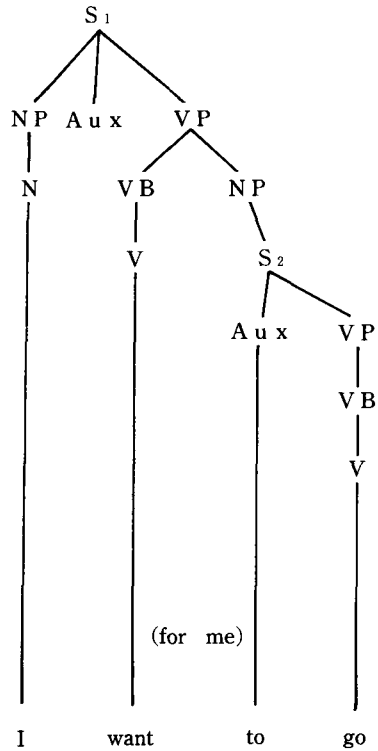
では、標準理論モデルをつかって、不定詞を含む文を分析してみよう。

(5) I want to go.

(深層構造) Table 12



(表層構造) Table 13



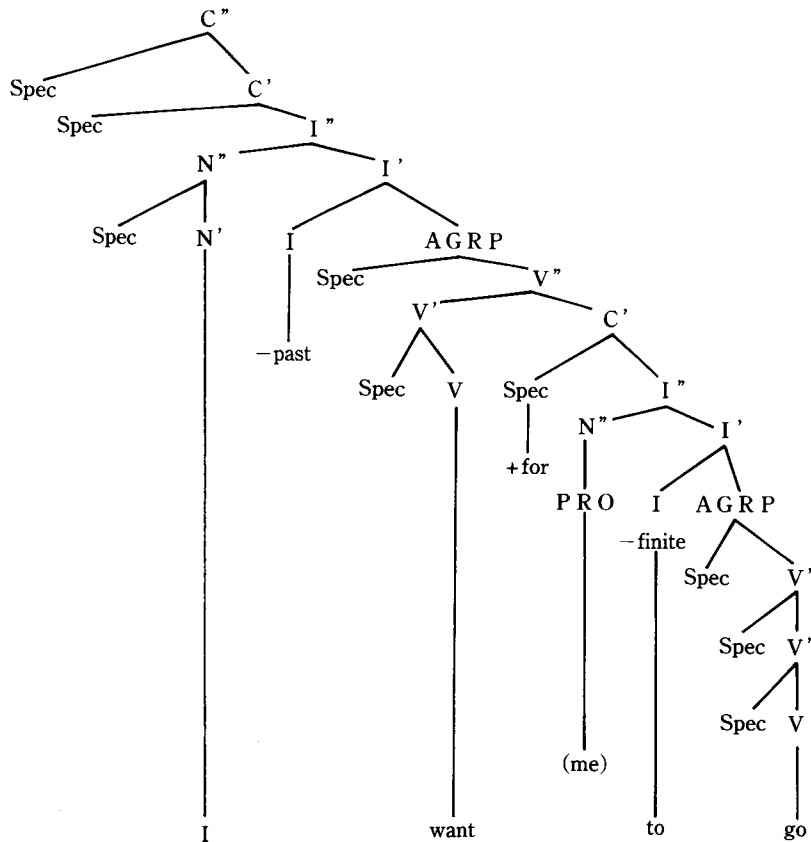
適用された変形規則

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| ① T-for...to complement | (for...to 補文変形規則) |
| ② T-equi NP deletion | (同一名詞句削除変形規則) |
| ③ T-for deletion | (for 削除変形規則) |
| ④ T-it deletion | (it 削除変形規則) |

伝統文法では、(5)の文は単文であり、不定詞は動詞“want”の目的語であるから、名詞句であり、この文は、いわゆる第3文型であると分析される。

しかるに、生成文法では、不定詞句は、はめ込み文 (embedded sentence)、すなわち、従属節であると見做される。(5)の文は、深層構造では I want it for me to go. と解釈される。この場合“it”は dummy (替え玉) として機能し、“I want it.”という文に“I go.”という、もう一つの文が、はめ込まれていると考えるのである。そして、まず、“I go.”の文に、「for...to 補文変形規則」(T-for...to complement)が適用され、“for me to go”が出力される。しかし、この場合、「欲する」人も、「行く」人も同じ人であるので、「同一名詞句削除変形規則」(T-equi NP deletion)によって、“me”が削除され、その後、「for 削除変形規則」(T-for deletion)と「it 削除変形規則」(T-it deletion)が順次、適用され、表層構造文“I want to go.”が出力される。

(原理変数理論モデル) Table 14



「標準理論モデル」と「原理変数理論モデル」を比較するために、Table 12 の枝分かれ図と Table 14 のそれとを見比べて載きたい。(5) の文のような簡単な文を生成するためには、どちらの理論に、より説得力があるだろうか。「原理変数理論」では、「最大投射原理」によって、種々の「句」ごとに「指定部」(Specifier)が生みだされ、その大部分が「空範疇」となっており、これらが、このモデルの枝分かれ図を、必要以上に複雑なものにしているのではないだろうか？

「原理変数理論」の強みは、あくまでその「語彙項目主義」から生じるものであると考えられる。したがって、その最大の弱点は、統語理論としての機能にあると言わざるを得ない。「原理変数理論」が、すぐれた統語理論である「変形主義」から遠ざかって、「標準理論」が示したようなバランス感覚を失うとき、自然言語の文法理論としては、ほとんど実用価値のないものとなるかも知れない。

参考文献

- Akmajian, A., and F. Heny, (1975), *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*. MIT Press.
- 安藤貞雄・小野捷, (1991), 『英語学概論』、英潮社。
- 荒木一雄、小野隆啓, (1991), 『英語の輪郭——原理変数理論解析』、英潮社。
- Baker, C.L., (1989), *English Syntax*. MIT Press.
- Baltin, M., and A. Kroch, eds. (1989), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. The University of Chicago Press.
- Bornstein, D., (1984), *A Introduction to Transformational Grammar*. University Press of America.
- Borsley, R. D., (1991), *Syntactic Theory: A Unified Approach*. Edward Arnold.
- Bresnan, J., (1978), “A Realistic Transformational Grammar,” in M. Halle, J. Bresnan & G. A. Miller, eds., *Linguistic Theory and Psychological Reality*.
- Chomsky, N., (1957), *Syntactic Structures*. Mouton. 『文法の構造』(勇康雄訳) 研究社、(1963)
- , (1964), *Current Issues in Linguistic Theory*. Mouton.
- , (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press. 『文法理論の諸相』(安井稔訳) 研究社、(1970)
- , (1972), *Studies on Semantics in Generative Grammar*. Mouton. 『生成文法の意味論研究』(安井稔訳) 研究社、(1976)
- , (1975), *Reflections on Language*. Pantheon Books.
- , (1977a), *Essays on Form and Interpretation*. North-Holland. 『形式と解釈』(安井稔訳) 研究社、(1982)
- , (1977b), “On WH-movement,” in P.Culicover, T. Wasow, and Akmajian, eds. *Formal Syntax*. Academic Press.
- , (1980), *Rules and Representation*. Columbia University Press.

- , (1981), *Lectures on Government and Binding*. Foris.『統率・束縛理論』(安井、原口訳) 研究社、(1986)
- , (1982), *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government & Binding*.『統率・束縛理論の意義と展開』(安井、原口訳) 研究社、(1987)
- , (1986a), *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. Praeger.
- , (1986b), *Barriers*. MIT Press.
- , (1988), *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*. MIT.
- , (1989), “Some Notes on Economy of Derivation and Representation,” in I. Laka and A. Mahajan eds., *MIT Working Paper in Linguistics*, Vol.10.
- Cook, V. J., (1988), *Chomsky's Universal Grammar*. Blackwell.『チョムスキーの言語理論——普遍文法入門』(須賀哲夫訳) 新曜社、(1990)
- Emmonds, J., (1976), *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press
- 郡司隆男, (1987), 『自然言語の文法理論』、産業図書。
- Haegeman, L., (1991), *Introduction to Government & Binding Theory*. Blackwell.
- 林栄一、小泉保編, (1988), 『言語学の潮流』、勁草書房。
- Horrocks, G., (1987), *Generative Grammar*. Longman.
- バック、E., (1974), 『文法の理論』(井上和子訳) 大修館書店、(1981)
- 今井邦彦、中島平三、瀬田幸人、福地肇、外池滋生, 『英語変形文法』、英語学コース3、大修館書店。
- 今井邦彦、中島平三、外池滋生、福地肇、足立公也, (1989), 『一步すすんだ英文法』、大修館書店。
- 稲田俊明, (1989), 『補文の構造』、新英文法選書第3巻、大修館書店。
- Jackendoff, R. S., (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press
- , (1977), *\bar{X} Syntax: A Study of Phrase Structure*. MIT Press.
- Jacobs, R. A. and P. S. Rosenbaum, (1970), *Readings in English Transformational Grammar*. GINN.
- , *Transformations, Style, and Meaning*. Xerox.
- Jacobsen, B., (1986), *Modern Transformational Grammar*. North-Holland.
- Kasher, A., (1991), *The Chomskyan Turn*. Blackwell.
- Katz, J. J., and P. R. Postal, (1964), *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. MIT Press.
- Lasnik, H. and J. Uriagereka, (1988), *A Course in GB Syntax*. MIT Press.
- 中村、金子、菊地, (1989), 『生成文法の基礎——原理とパラ미터のアプローチ』研究社。
- Newmeyer, F. J., (1983), *Grammatical Theory: Its Limits and Its Possibilities*. University of Chicago Press.
- , (1986a), *Linguistic Theory in America*. 2nd Ed., Academic Press.
- , (1986b), *The Politics of Linguistics*. The University of Chicago Press.
- , ed., (1988), *Linguistics: The Cambridge Survey*, Vol.1, Cambridge University Press.
- Radford, A., (1981), *Transformational Syntax*. Cambridge University Press.『変形統語論——チョムスキー拡大標準理論解説』(吉田正治訳) 研究社、(1984)
- , (1988), *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.
- Riemsdijk, H., and E. Williams, (1986), *Introduction to the Theory of Grammar*. MIT Press.
- 斎藤興雄、佐藤寧、B. M. ウィルカーソン、(1989), 『新英文法入門——理論と演習』研究社。
- Salkie, R., (1990), *The Chomsky Update: Linguistics and Politics*. Unwin Hyman.

Sells, P., (1985), *Lectures on Contemporary Syntactic Theories*. CSLI.

Smith, N. and D. Wilson, (1979), *Modern Linguistics: The Results of Chomsky's Revolution*. Penguin Books.

Stuurman, F., (1985), *Phrase Structure Theory in Generative Grammar*. Foris.

鈴木英一、(1990)、『統語論』、現代英語学シリーズ5、開拓社。